

—暗闇から創りだす— さわれば当たる ミュージアム

広瀬 浩二郎

(ひろせ こうじろう)
民族文化研究部

ただ「見る」だけの「さわらない日常」から飛び出そう。
「見ない」で経験するすばらしい出会い。
「さわる」プロが考える21世紀の博物館は、
五感のもつ創造的の可能性をひきだす開かれたミュージアムだ。



ニューヨークのメトロポリタン美術館には、さわれる物を集めた「タッチコレクション」があり、事前申し込みをすれば自由に見学(触学)できる。2002年12月撮影

博物館が育む「豊かな触生活」

「さわらぬ神に当たりなし」。などといきなり神様をもち出すのは不謹慎かもしれないが、最近のほくのモットーは、いろいろな物にさわってみれば、きっと何か「当たり」(すばらしい出会い)を経験できるのではないかと。もちろん、何にでもさわると過度に強調するつもりはないし、ほくはセクハラおやじにもなりたくない。でも、ほくたちの生きる現代は、街中にあふれる案内表示、インターネットやコンビニの普及などが象徴するように、静かに「見る」ことばかりが重視されている。人や物の接続を嫌う「さわらない日常」が、いつか当たり前となってしまう。「さわらない日常」はほくたちの自由な発想を阻害するものであり、じつは

世界にさわること、さわる世界から「当たり」はやってくるはずだ、とほくは信じている。

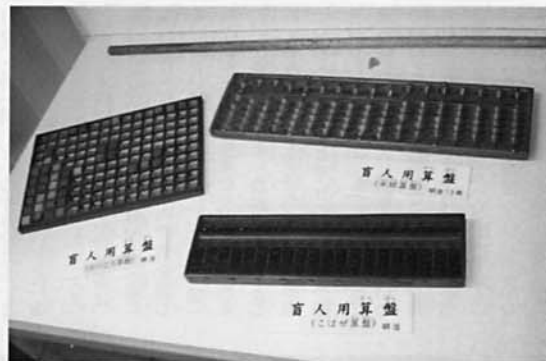
というわけで、今回は「さわる博物館」の可能性、「豊かな触生活」についてあれこれ議論していきたい。21世紀の博物館を考えるキーワードは「ユニバーサル・ミュージアム」。だれでもが楽しめる開かれた博物館。ほくは視覚障害者をユニバーサル・ミュージアムのシンボルにしたいと思っているし、そうなりうることを確信している。従来の博物館、美術館はガラスケースに囲まれた展示、視覚的に味わう展示が大半だった。その意味で視覚障害者(特に全盲者)は、博物館とはもったいない存在、バリアに阻まれた人びとだったともいえる。そんな全盲者でも、いやそんな全盲者こそが楽しめる博物館を構想することから、開かれたミュージアム作りは始まる

のだから。

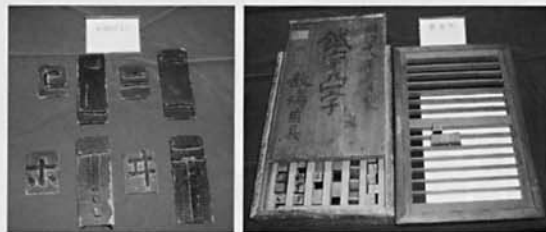
ユニバーサル・ミュージアムの主役となる視覚障害者たちは、暗眼者以上に「豊かな触生活」から得られる「当たり」を知っている。視覚障害者は見えない(見ない)分、当然よくさわる。いうまでもなく、貴重品の保存を考慮すれば、「あらゆる展示品にさわれ」とはいかないが、彫刻作品等では材質や込み入った細工など、さわってみないとわからないことがたくさんある。ほくがここで改めて力説しなくても、昨今あちこちで改められる展示、ハンズオンについての模索が始まっている。子どもたちが好奇心のままに何にでもさわって新たな事実を発見するように、さわる行為には種々の意味があるはずだ。視覚障害者は、いわば「さわる」プロ。その「さわる日常」から今後の博物館作りに向けて学ぶ点が多いと思う。

「五―四」、それとも「五―六」?

「全盲」と聞けば、まず暗眼者は自分が目をつぶった状態を想像するだろう。実際、視覚障害者のガイドヘルパー(移動介助者)養成講座などでアイマスク体験をしてみたら、「真っ暗」「怖い」「たいへん……」という素直な感想が多い。「五―四」となるのが当たり前で、五感のうち四感しか使えない人



盲人用算盤。これを使って珠算大会をすれば、けっこう子どもたちにうけるかも(京都府立盲学校所蔵)



点字考案以前に使われていたさまざまな浮き出し文字(企画展に出品予定)。さて、あなたは触読できるでしょうか?(筑波大学附属盲学校所蔵)



内山春雄氏が制作した「バード・カービング」(企画展に出品予定)。実物そっくりの「鳥」の模型にさわり、囀き声を聞けば、自然はより身近なものとなる。2005年6月撮影

びとは、「障害者」とされるのが常識である。「真々暗」「怖い」「たいへん」というのは第一印象としては事実なのだが、そこに留まっていたら「豊かな触生活」は生まれない。ほくは「五―六」とする工夫、すなわち人間の五感の潜在力を引き出す知恵が「真々暗」「怖い」「たいへん」の先にあると信じている。

「五―」の意味を考える素材となるエピソードをひとつ紹介しよう。本間一夫さんは幼いころに失明し、点字と出会うことで読書の喜びを知った。彼は視覚障害者の読書環境を改善する

ために日本点字図書館を創設し、点字の普及、盲人福祉の向上に尽力した。彼の自伝「指と耳で読む」(岩波新書)は、二〇年以上も読み続けられている名著である。本書が刊行される際、編集担当者は「間の中の読書」というタイトル案をもっていた。しかし、その提案を受けたとき、温厚な本間さんがきつぱりと断ったという。われわれ全盲者の住む世界は「間」などではない。たしかに「間に葬る」「間取り」などなど、「間」のイメージはイナナスだ。岩波の編集者としては、「間」という



ワシントンD.C.の「ナショナル・ギャラリー」にて。手を動かし、点から面、立体へと自分のなかに作品のイメージを創っていく作業は楽しい。2002年12月撮影

「生活」を共有できるのか。これはほぼ自身のライフワークであり、ユニバーサル・ミュージアムの課題でもある。ほくはいま、「五―四六」を実感するための仕掛けとして、本間さんが拒絶した「闇」を使ってみたく考えている。

楽しいかな闇鍋人生

二〇〇五年七月三日、ほくは「視覚障害者のナビゲートによるダイアログ美術鑑賞会」なるイベント（読歩プロジェクト実行委員会主催、「こえとことば」の部屋）にホスト役として参加した。暗闇のなかでアイマスクを着けた二人が木彫作品にさわり、その感想を対話形式で交換するという単純な企画なのだが、なにせ一寸先は闇。何が起るか分からない。「なやみくやみ」は後にし、とりあえずほく

自身「この「闇」を「むやみやたら」とエンジョイしてみようと、イベントに加わった。

「五―四」を常識とする暗眼者は、やはり暗幕で閉ざされた暗闇の会場に入っただけで、ある種の恐怖を感じる。お互いに声をかけあひながら「闇」のなかに恐る恐る進むのが、暗中模索（悩みやみ）の第一段階である。ところが着席後、ほくがさわるこの意義について語り、それぞれの方法で木彫作品にさわりはじめると、「闇」の不思議な魅力に気づく。視覚を使えないのではなく、視覚を使わない世界から得られる新鮮な驚きと発見。そんな非日常的経験を単刀直入（むやみやたら）に楽しむ。この「悩みやみ」から「むやみやたら」への転換こそが、今回の「闇」イベントの眼目だ。

参加者たちの「木の匂いっていいね」「声によるコミュニケーションの大切さを再認識した」「さくらざらした部分と、すべすべした部分のコントラストがおもしろい」といった言葉には、ほくも大きくうなずいた。鑑賞会の第二部では、会場を明るくして意見交換をおこなうたが、「実際の色は、さわって想像していたのとは違う」「作品の裏表の関係や質感は、さわらないとわからない」などの発言があった。一目瞭然の視覚と異なり、触覚は点から面、立体とイメージを膨らませることによって作品を

理解する。頭と手をフル活用して「闇」から「豊かな触生活」を創っていく刺激的な作業。どうやら「闇」は「見る」文化（さわらない日常）に何らかのインパクトを与えたようだ。

さて、「五―四六」になれば人生おもしろいというのがほくの持論だが、まだ半信半疑の方もおられるだろう。ほく自身、果てしなく広がる「闇」の入り口で、瑣末な出来事に悩みやみする毎日である。そんな悩みやみから辿りついたのが、闇鍋精神を自覚する仕掛けとしてユニバーサル・ミュージアムを用いるアイデアだ。何が出てくるか予想できないワクワク感と、何が起こっても楽しめる図太さ。この闇鍋精神こそが、「一寸先は闇」に打ち勝つ無敵の人生論なのではなからうか。単なる視覚障害の擬似体験（真・暗「怖い」「たいへん」というのでなく、闇鍋精神



現在、民博では「みんなミュージアムパートナーズ」の協力を得て、「すべての人にやさしい博物館」をめざす研修をおこなっている。バリアフリーとは、やはり理論より実践なり！ 2005年7月撮影

を養う目的で、あえて日常的によく使っている視覚を塞ぎ、四感で闇と向き合う。そこには、きつと「五―四六」となる豊かな触生活があるはずだ。

「やみつき」になるような博物館とは

本間さんが「闇」を全否定しなればばならなかった時代に比べれば、今回のようなおもしろ鑑賞会が開かれる現在は、いい時代なのだと思う。「闇」イベントの魅力が病みつきとなったほくは、人びとの悩みやみを吹き飛ばすような企画展を計画中である。題して「触文化の可能性――さわられる展示」から「さわる展示」へ。これまでの民博の「常」設展は、「見て楽しむのが「常」識で、視覚障害者はさわってもいい、手の届く物にはさわられるというスタンスだった。そんな健「常」者本位の日「常」を抜け出して、すべての来館者が「さわること」から五感（人間の）もつ創造的能力に気づいてほしいというのが、わが企画展の趣旨だ。

まずは「当たり前」を求め、たくさんの方がむやみやたらに来年三月から九月まで開催予定のわが企画展を訪ねてくれることを願っている。みなさんと豊かな触生活を共有できるように、もちろん「闇」の仕掛けも用意するつもりだ。



札幌市の北海道開拓記念館にて。同館では視覚障害をもつ来館者のリクエストに応じて、解説員による「さわるツアー」を提供している。「群首象を撫でる」を思い出しつつ、じゅくりとさわる。2005年5月撮影

表紙モノ語り

屏風で語る「イエスの生涯」

本館展示「朝鮮半島の文化」（標本番号H214475） 幅340cm 高さ162cm

朝倉 敏夫

民族社会研究部



韓国では儒教の教えが根付いており、「孝」の証として、四代上の祖先まで、その命日には家庭で祭祀がおこなわれる。この儒教式の祭祀では、祖先にご馳走を供え、その後ろには儒教の教えを書いた屏風が

りに使われることがある。この屏風には「イエスの生涯」が描かれており、写真にあらわされている絵は、右から「病者を治すイエス」「最後の晩餐」「折拂すイエス」「裁かれるイエス」である。絵の下にはそれぞれ聖書の節マタイ四章三節「一歳言一七章節一ルカ二二章四四節」「ルカ二二章三三節」がハングルで書かれている。

キリスト教徒の家庭の多くが、こうした屏風をもっているとはいえないが、儒教社会の韓国にキリスト教が布教され、土着化する過程で創り出されたものと考えられ、韓国のキリスト教の一端を示す資料

立てられる。

キリスト教では、こうした祭祀を偶像崇拝であるとして認めていないが、命日には追悼礼拝をおこなうことが多い。そうしたとき、表紙の写真のような屏風が儒教式の屏風の代わ

と考えられる。ソウルの江南にある高速バスのターミナルの向かいには「キリスト教百貨店」があり、キリスト教関連のグッズがたくさん売られている。この屏風も、そこで購入したものである。